

「意思に従います」

(詩篇26・1〜12)

一、作者はダビデ？

詩篇26篇を開いています。表題に「ダビデによる。」とありますが、多くの注釈書は、作者をダビデと認めています。私は、作者がダビデであるとして読んだ方がスムーズに受け止めることができると思います。と言いますのは、6節後半に「主よ 私はあなたの祭壇の周りを歩きます。」とあります。祭壇の周りを歩くことができたのはだれかと考えれば、祭司とレビ人の他には、ごく一部の人であったことでありましょう。王であったダビデには、それができたとされます。また、7節には「感謝の声を響き渡らせて 語り告げます。あなたの奇しみわざのすべてを。」と歌っています。これを語り告げられるのは、ダビデなり、ありそつなことでは、あるいは8節に、「主よ 私は愛します。あなたの住まいのある所 あなたの栄光のとどまる所を。」と歌われています。このように表現できたのは、ごく限られた人でありましょう。ダビデと考えるなら、あり得ます。さらには、9節、10節で、神の前にストレートに訴えています。以上の要件を満たすことのできる人は、ダビデ以外には考えにくい

です。

二、主のさばきを求めて

1節を見てまいります。「主よ 私を弁護してください。私は誠実に歩みよるめぐことなく、主に信頼しています。」とあります。9節を見ますと、「ダビデ」は訴えられていたのであります。それは、身に覚えのないことでした。ゆえに、神のさばきを求めています。2節を見てまいります。「主よ 私を調べ 試みてください。私の心の深みまで精錬してください。」とあります。「ダビデ」は、イエス時代のパリサイ人のように「自分は正しい」とうぬぼれていたのではありません。「私の中に、あなたへの不誠実な思いはありません」という意味で語っています。続いて、3節を見てまいります。「あなたの恵みは私の目の前にあり あなたの真理のうちに 私は歩み続けました。」(二)に、「恵み(ヘゼド)」と「真理(エメス)」という二つのことが登場しますが、おそらく意図的です。なぜならこの二つのことは、旧約で神のご性質を表すことばだからです。 続いて「ダビデ」は、自らの思いを語ります。4節、5節です。「私は不信心な人とともに座らず 偽善者とともに行きませぬ。悪を行う者の集まりを憎み 悪しき者とともに座りませぬ。」と。これは「ダビデ」の決意です。ですが、

ここは法廷の場ではありません。敢えて言うなら、「ダビデ」は天の法廷において神に祈り、訴えています。6節、7節、8節は、「ダビデ」が主を愛し、主の前に望みを持っていることのあかしです。(詩篇26・6〜8)

三、天の法廷で解決される

9節をご覧ください。「どうか私のたましいを 罪人どもとともに 私のいのちを 人の血を流す者どもとともに取り去らないでください。」とあります。「ダビデ」は、何かのことで訴えられていたのであります。訴える者たちは、「ダビデ」の身近にいたようです。そのことは、他の詩篇から類推することができます。そこで「ダビデ」が取った行動は、主の前に祈り、訴えることでした。行き詰まってしまい、万策が尽きてしまったように思われるとき、主の前に出て祈ること、訴えることは大切です。そうしますと、それまで自分を悩ませていた状況が小さく見えてまいります。主にあつて、その大能の力によって強められるからです。現実はそのままなのです。10節です。「彼らの手には悪事があり その右の手は賄賂で満ちているのです。」と。しかし主は、新しいところに導いてくださいます。11節です。「しかし私は 誠実に歩みます。私を贖い出してください。あわれんでください。」と。困難に遭遇したとき、

神に訴える術を知っている者は幸いです。すなわち、神を知り、罪の問題から解決されている信仰者は幸いです。「ダビデ」は、神から授かった特別な恵みによって主の前に祈っています。私たちはイエス・キリストという神の恵みをいただいたことにより、恐れることなく、大胆に主の前に祈り、訴えることができます。最後に、12節です。

「私の足は平らな所に立っています。数々の集いで 私は主をほめたたえます。」と歌っています。主の取り扱いを経た者は、不安定な場所ではなく、足元が揺るがない平らな場所に立っています。そして、主をほめたたえます。

四、神を畏れる生活

主を畏れる人は幸いです。思ってもみなかった困難に遭遇したときに、主の前に祈り、訴えることができるからです。その術を身に着けるなら、動揺することが少なくなります。平坦な人生を歩むことのできる人は、おそらく一人もいないことでありましょう。パウロも「ダビデ」と同じく、様々な方からさばかれたようです。ですが、キリストを知ることのゆえに、気に留めていませんでした。少し長いのですが、コリント人への手紙第一4章3節から5節を見てまいります。「コリント4・3〜5」と。主を畏れる(恐れる)とは、こういうことです。